
生贄ヒーロー

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生贄ヒーロー

【Nコード】

N5475W

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

突然、目の前には美女と美男子が。

北京で蝶が羽ばたけば、ニューヨークで嵐が起こる？

都内某所某アパートで欠伸をすれば、異世界に召喚される！？

生贄ヒーローと呼ばれる二十九歳OL 木村ヨリの、わけもわからず始まってしまった下ネタ満載逆ハー(?) 異世界冒険譚！

バタフライエフェクト

北京で蝶が羽ばたくと、ニューヨークで嵐が起こる。

アマゾンを舞う一匹の蝶の羽ばたきが、遠く離れたシカゴに大雨を降らせる。

そんなカオス理論があるけれど。

じゃあ、東京の某所某アパートで欠伸をしたら？

あたしは木村ヨリ、二十九歳、独身。

真面目についてわけじゃないけど、それなりに普通には働いてて、それなりに普通に酒も飲めば煙草も吸う。

それなりに普通に片手以上両手未満の男と付き合い、今のところ、それらは手元に残ってはない。

特別何かが出来るわけでも、また、出来ないってわけでもないと思う。

そう、仕事から帰って、キャミとショールパンに着替えてからベッドで欠伸をするまでは。

「……何」

疑問符さえ付かなかった。

正直に言くと、完全に、現状に対して思考が置いてきぼりだった。

「待ってたよ、生贄ヒーロー」

突如目の前に現れたお姉さんは、真っ黒いロングワンピースらしきものを着ていて、謎のヒーロー発言をしてから、それはそれは妖艶に微笑んだのだ。

——お姉さんは、絶世の美女だった。

じゃ、なくて。

ヒーローって何？

ヒロインじゃなくて？

いや、まあ、二十九歳でヒロインてのは流石に痛いと思うけども。

いや……『生贄ヒーロー』って、どういう……？

それより、取り敢えずお姉さんの髪は真紅だけど染めてるの？
似合うけどさ。

「生贄スケープゴートとも言えはわかるんじゃない？ ねえ、わかる？ 『生贄スケープゴート』」

うわっ！

び、びっくりした！

美女の隣から突然の登場を果たした彼は、上から下までキンキラキンのこれまた絶世の美男子。

金髪に金眼、真っ白なお肌に金の刺繍が施された真っ白な詰襟ジャケットとパンツを着用している。

……何かこう、お姉さんと言い美男子と言い、やたらとファンタジーな格好してるね。

……ファンタジー？

……あはは、まっさかー。

ていうか、別の言い方したところでそれって結局生贄だよね。

この時代に日本で生贄？

そんなのあるの？

土葬の習慣はまだ残ってるところもあるらしいけど、流石に生贄はないんじゃないかなあ……。

ていうか。

「日本語上手いね」

言うに事欠いて、第一声がそれでした。

さて、冷静に考えた場合、人の瞳の色は濃褐色^{ブラウン}、淡褐色^{ヘーゼル}、琥珀色^{アンバー}、緑色^{グリーン}、灰色^{グレー}、青色^{ブルー}に大別される。

中には青紫色^{ヴァイオレット}や赤色^{レッド}を持つ人もいるけれど稀であって、赤色に限っ

ては人類人口の0.001パーセントと言われるほどだ。
何故詳しいかって？

興味があつて調べたことがあるからです。

ふと、美男子を見やる。

やっぱり、金の目の色をしている。

……イエローベースの琥珀色アンバーと見間違えたかとも思ったけど、違う。
彼のそれはキンキラキン、紛うことなき金色。

……

……

…… ありえない。

——ふと見渡せば、周りは真っ黒だった。

のに、この二人だけ、見えてる？

明かりなんてどこにもない。

寧ろあたしは、鳥目で夜目は効かなかったのに。

違うでしょ。

あたし、さっきまで何してた？

帰ってから着替えて、ベッドに胡座掻いてビール飲もうかなって思
いながらそれをテーブルに用意して、手を伸ばしたところで欠伸を
しただけだよな？

寝てない。

あたしまだ寝てない。

だからこれは、夢じゃないってことだけは、断言出来る。

「な……何事!？」

急にこわくなって挙動不審に陥れば、パリーンッと何かが割れた音。

「ひいっ!？」

暗いのこわいののに、その上何なの!？

またも動揺を上乗せすれば、またまたガコーンッと何かが落ちたみたいな音。

もう勘弁してええええ!……!!

意味がわからないし、何はともあれ本当にこわいから!

暗いのためだから!

「落ち着いて」

お姉さんが、この世とは思えない妖艶な笑みを浮かべてそう言った。

「お、落ち」

着けない。

とまでは言えず。

唇に何かが触れて、……あ、ちゅうされたのなんて久しぶり……とかばかなことをぼんやり考えてたら、視界が暗転して。

「おはよう、気分はどう？」

気づいたら、

「——え？」

真っ裸のお姉さんに抱かれて、ふっかふかのベッドにいました。

「え……—あ、れ？」

お姉さん——胸が真っ平らなんだけど。

ファーストインパクト

「二度目まして。俺はビィビィナタニエル・ブラウズ・ランジェラ」

「ビ、ビィビィナ……？」

「ふふ、BBでいいよ」

優しく髪を梳かれて、頭がぼんやりとする。

BB……で、いいのか……で、BBで……ベッドで……ふかふかで……真っ平ら……で——

真っ平ら、だよね。

真っ裸、だよね。

俺って、言ったよね。

「男お！？」

「そうだよ……あ、見えてるよ」

がばっと距離を取り起き上がったあたしの肩から、するりと上掛けが滑り落ちる。

それをさり気なく引き上げてくれたBB。

あ、ありがとう。

じゃ、なくて。

「ごめん、ちょっといろいろわからないんだけど、何？何なの？ここどこ？貴方誰？何があってどうなってこうなってる？」

「俺はBB・ランジェラだってば」

「ああ、うん。BBだね、さっき聞いた」

聞いたけど、聞いたのもわかったのもそれだけ。

何より先に、取り敢えず。

「やって、ないよね？」

失礼、と一言添えて、ぱっと上掛けを捲ってぱっとそれを戻す。

……二人とも真っ裸でした。

疑わしい……けど、正直、悲しいかな、寝込みを襲われたことはないので、そこまで自分に魅力があるとは思わないけど。

思わないけど、事実は事実として、彼はそこに真っ裸で横たわっている。

じいっと穴が開くほど見詰めた彼の瞳は、あたしと同じ真っ黒。それがまた、妖艶に弧を描いて――。

「同じ色を初めて見たけど、そそられるもんだね」

「は？」

「そうだね、それもいいかもね。簡単だし」

くると、視界が反転した。

目の前にはBBがいる。

その思ったよりしつかりとした肩越しには、見たこともない高い天井。

どこなの？

何なの？

「大丈夫だよ」

——何が？

という言葉は柔らかな唇に飲み込まれ、あれよあれよという間に——

……快楽の波に飲み込まれました。

べ、別にあたしが特別ライトなわけじゃないのよ！

……腰が痛い。

「大丈夫？ ヨリ」

すっかりあたしを抱き込んだB Bが、氣遣わし気に覗き込んでそう言った。

大丈夫かと言うわりに、腰に回された腕は、押しても引いてもびくともしない。

ちくしょう、乙女が皆、一回寝たくらいで絆ほだされちゃうよ！
一回どころじゃなかったけどね！

「ねえ、大丈夫？」

絶世の美女が——いや、美女じゃないんだけど、とにかくこんな美人が心配気に二回もそんなこと口にしたら、一般人のあたしには文句も喉から押し戻されてしまう。

「だ、大丈夫だけど……」

腰はすこぶるぎしぎし言ってるけども。

とまでは、やっぱり言えず。

ただ、さり気なくマッサージしてくれてる辺り、手馴れてるなあと思いつつも、ありがたいのでやっぱりそれとも言わない。

「初めてじゃなかったから、もしかしたら曖昧な部分もあるかもし

れないけど」

「処女崇拜は海外から来た文化だから、あたしには通用しません」
「何の話？」

貴方が言い出したんですよ。

「あれ？情報の共有が出来たはずなんだけどなあ」

情報の……共有？

わけがわかめです、と言い掛けて、握られた手を見詰めながら、はたと気づいた。

彼はビィビィナタニエル・ブラウズ・ランジェラ。

大抵の人にはBB・ランジェラで通している。

淫魔族の青年で、あたしと共に在るべく選出された者。

ここはイヴィーと呼ばれる世界の中心にあるタンジーナバロウ大国王宮の一室で、あたしのために用意された場所。

そしてあたしは——召喚された生贄。

あたし
生贄は剣。

剣は鞘を探すべく、世界を旅して平和を、安寧の世を保たねばならない。

——何で、そんなことが頭に浮かぶの？

「ああ、大丈夫みたいだね」

握られた手は緩く解かれ、またも、真っ黒の目が弧を描く。

真っ黒……BBの瞳は夜色だなあと、頭の片隅でぼんやりと思った。

「何かよくはわからないけど、あたしは召喚されたってこと？ 戻るのかな？」

そういえば、名乗ってないのにBBはあたしの名前を知っていた。それもつまり、情報共有ってことなんだろうか。

まあ、されたものは仕方ない。

こんなラノベも真っ青な事象が、あたしに起こるとは思わなかったけど。

あたしが楽観的でよかったね。

卒倒しただけで済んだんだから。

普通なら、もしくはもっと気が弱い子とか繊細な子だったら、もっと大事になってもおかしくないと思う。

しかしだ、戻れると言うなら、全て水に流す！

細かいことはこの際気にしない！

何故なら、やっぱりよくわからないから！

「……戻りたいの？」

「まあ」

「あれ？」

首を傾げたBBにつられて、同じく首を傾げる。

「俺ね、淫魔族なの」

「そうみたいだね、よくわかんないけど」

ファンタジー過ぎちゃって思考が追いつかないので。

「淫魔族ってさ、房術はうじゆつが使えるんだよね」
「棒術？」

カンフーみたいな？

長い棒を振り回して戦うのが得意ってこと？

あれ、カンフーってそういうものだったけ？

で、それが今、何の関係が？

「うーん……セックスすることで相手に魔力を流して、いろいろ出来るんだよね。傷を癒すとか体力回復とか、魅了チャームとか」

「へえ、便利だね」

やっぱりよくわからないけどね。

「魅了^{チャーム}を使ったんだよ、さつき」

「え？」

「ヨリってさ、気が強そうなんだけど、啼いてるときは思った以上に可愛いなあって。つい」

待って。

待って待って、ようやくだいぶ、ちょっと理解が追いついた。

つまり。

あたしとのセックスで魔力とやらを使って、あたしを自分に夢中にさせてパシリにしようとしたってこと！？

「だから、戻りたいなんて思わないはずなんだけどなあ」

とか、何とかかんとか。

聞こえません。

聞きません！

「最低じゃねえか」

「……何か、大幅に勘違いしてる？」

勘違いではなく事実です。

よかった、効いてないみたいで！

「うーん……もしかしてヨリも『無の魔力』持ち？」
「何の話？」

かくつと首を傾げたなら、形良い眉が少しだけ顰められた。

「……異邦人だからなのか、上手く情報共有が行き渡ってないみたいだね」

異邦人なのは、あたしのせいではありません。

ロングロングアネーム

で、結局薬局何なのかって言うと。

わからないままに、またもや見知らぬ方々がご登場あそばされました。

——ドアを蹴破って。

「BB！気配を消すなど何度言ったら……」

「お前はいつも口うるさいね」

「そういう問題ではないだろう！」

そういう問題じゃないのかもしれないけど、その貴方も目前の大問題をまる無視してますよ。

あたし、一応三十路直前とはいえ、嫁入り前の乙女なんだけど。

ドアを蹴破るほどの方々に、そんな意見をする勇気がないのが悲しいけどね。

真っ裸なんだけどね。

ええもう、上掛け一枚引っ剥がしたら真っ裸なんだけどね。

とは言え、三十路直前だけあってか突然いろんなことがあったからか、ぼんやりとBB達のやり取りを眺めながら、あたしは達観していた。

悟り？

これが噂の悟りの境地なの？

それはさておき。

見知らぬ方々はB B含めて総勢四人。

それはもう、目も眩むほどカラフルな方々だった。

入室早々B Bに突っかかった硬派な感じの彼は、さっぱりショートにした髪の毛が群青色で瞳の色は青色。ウルトラマリンブルー
ブルー

まあ、青繋がりで妥当と言えば妥当な色合い。

その後ろで黙ったままB Bを呆れ気味に見据えている大人っぽい彼は、漆黒のストレートヘアを右側にきゅっと束ねていて、瞳の色は氷みtainな薄い青。ブルー

色素が強い黒が地毛なら、目の色は珍しいことになるのかな。

でも、ありえないわけではないよね……ない、はず。

ここまではいい。

無理矢理よし、とする。

問題はここからで、漆黒の彼の隣でベッドに腰掛けてB Bとにこやかにライトに笑い合う彼は、最初に会ったキンキラキンの美男子だ。四人共にかなりな美人さんだとは思うけど、B Bと彼だけは格が違う。

とんでもなく、ずば抜けて美人。

話が逸れたけど、彼はとにかくキンキラキンなのだ。

やっぱりおかしいでしょ!?

ありえないでしょ!?

明るい場所で見たって、あれはやっぱり琥珀^{アンバー}色なんかじゃないもの!

まじまじと見詰めていたからか、キンキラキンくんがふと、ようやくあたしの存在に気づいた。

「あ、起きた?」

さっきから起きてましたよ。

にこつと、それは眩しく笑顔を浮かべられ、やっぱり喉から押し戻されてしまうあたしは悲しき一般人。

キンキラキンくん、ビューティーオーラが半端ないね!

「はじめまして、ええつと……」

「ヨリ、木村ヨリだよ」

二度目ましてなんだけどね。

「ヨリ!僕はデイルディペルティア・アルマスイマツチ・ピピウオツチ!」

「デイルディ……ええつと」

BBもだったけど、長ったらしいな、もう。

「デイルでいいよ」

にこっと笑ってくれたのでにこっと笑い返したら、

ぐっと、

乳を鷺掴まりました。

——は？

「ち、乳を鷺掴むな——！！！！！！」

思わず叫んだだけだった。

のに、バリーンッて、何かが割れた。

ふわりと風が舞い込む。

薄暗かった部屋に、ちらりと光が射した。

……あれ、今気づいたけど、もしかしてこの部屋、真っ暗だった？
え、何で気づかなかったの？

「まだ喚よばれたばかりで落ち着いていないんだ。あまり興奮させる
な、デイル」

漆黒の君が呆れ気味にディルを諫める。

けど、今、そういうことが問題だったの？

何かいろいろ違う気がしてるのは、あたしだけなの？

何が割れたの？

何で割れたの？

何で見えるの？

意識してみれば、やっぱり部屋は真っ暗で、けれど、あたしはしっかりと四人を目視出来ている。

あ、やばい。

また混乱しそう。

よし、一回忘れよう！

漆黒の君がついと前に出たので、それに合わせて視線を上げた。

「わたしはエウ・スイ・ヴァラフ。竜族だ」

「……はあ」

——他にどう言えと！？

聞き間違いじゃないよね。

聞き間違いならそれでいいし、冗談なら「やあだあ、アメリカンジョーク？」なんて笑ってあげてもいいんだけど。

眉間に寄ったシワを見留めたのか、エウの表情が陰しくなった……のは、間違いないと思う。

「BB、お前ならとくに、情報共有を図ったと思っていたんだが」
ちよつと棘があつたのも、たぶん、気のせいじゃないな。

BBは「まあね」と軽く受け流してから、ちらりとあたしに視線を
寄越して、また腕を絡めてきた。

「お前、やはり……！」

「まあ聞いてよ。情報共有はしたんだよ、ただ、ヨリは異邦人でし
かも処女おとめじゃなかった。だからかはわからないけど、情報が断片的
で全て行き渡ってはないみたいなんだよね」

真っ赤になつて激昂した硬派くんを宥め、BBは、さらりとそんな
説明を試みせた。

……デリカシーとか、どっかに捨ててきちゃった人達なんだね。
やった後に言うのも何ですが。

「ちなみに、魅チャーム了もあんまり効かないよ。この世界に馴染んでなか
った最初だけ、かな」

「ふむ……」

エウが何か思案する素振りを見せたけど、あたしは今、別のことを

考えている。

最初だけ。

最初だけって、言ったよね。

思い出せ、呼び起こせ、あたしの脳味噌！

最初って……あれか、暗転したちゅうか。

つまりだ、ちゅうからセックスに持ち込むまでが最初か。

「神様……！」

「「「！？」」「」」

急に祈りのポーズを取ったあたしに四人の視線が向けられたけど、そんなのはどうでもよかった。

あたしやっぱり、ライトなわけじゃなかったんだ！

よかった！

あれはよくわからない魔力とやらが作用してただけだったんだね！

「……お前は巫女なのか？」

「そんなわけあるか」

硬派くんの青色^{ブルー}をひたと見て、あっさり否定を口にした。

あたしはただのOLです。

てか、ごめん。

硬派くん、名乗ったっけ？

貴方の名前まで長ったらしかったら、あたしもう、覚えきれないけど。

ロングロングアネーム（後書き）

エウさんの名前はスワヒリ語から拝借しています。

【エウスイ】は【黒】

【バラフ（作中ヴァラフと表記）】は【氷】

という意味だそうです。

B Bとデイルは、長ったらしい名前がつけたかっただけです。

そして、ロングロングタイムアゴー

——昔々。

世界イヴィーは、魔族、妖精族、竜族、人間がいがみ合い殺し合い、混沌としていたという。

イヴィーの東の大陸に、タトゥーナという人間の女性がいた。彼女は絶大なる魔力で以て、たった一人で世界を渡り、平和と安寧をもたらした。

そんな彼女はあるとき、帰還の旅の途中でアウゼンベルグという名の剣士と恋に落ちる。しかし彼は、タトゥーナを陥れようとする傭兵であり、彼女は彼によって討たれてしまう。

タトゥーナはアウゼンベルグを呪った。
タトゥーナは世界中をも呪った。

わたしが愛したというのに。
わたしが救ったというのに。
何故、わたしがこんな目に遭わねばならぬのか。

彼女の死に際の呪詛はタトゥーナ自身を剣に、アウゼンベルグを鞘へと変えた。

わたしで以て貴方を貫き、一つとなるまで、世界を赦さない。

そして剣は忽然と消え、鞘はこの世界のどこかで、剣が収められる

ときを待っているという。

呪詛によってその身に受けた、禍々しい瘴気を撒き散らしながら――

「これが、イヴィーに伝わるタトゥーナ伝説。剣と鞘の物語とも言われてるね」

「はあ……」

侍女のメルボリーちゃんに櫛を手渡されながら、BBは、長いんだか短いんだかな伝説とやらを語ってくれた。
てか、メルボリーちゃんがいるなら、貴方がいる必要はどこに？

赤茶色のふわんふわんした髪を揺らしながら、「ではまた。ヨリ様、失礼致します」と可愛らしい笑顔で礼をして退室していった彼女を横目で会釈しつつ見送り、そんなことを思った。

メルボリーちゃんも淫魔族らしいけど、そうは見えなかったなあ。
人を見掛けによらないのかな。

ある意味、BBは見掛けによらなかったけど。

「ヨリはやけに髪が短いね。せっかく綺麗な黒髪なんだから、伸ばしてみたら？」

速攻で終わってしまったヘアブラシを残念そうに鏡台に置いて、麗しき絶世の美男は、ふうと溜め息を零した。

ちなみ、あたしはベリーショートの楽ちん加減が非常に気に入っているの、伸ばすつもりは毛頭ない。

ついでに、その誰それさんとか言う彼女の伝説もどうでもいい。

横文字の名前なんぞ、一辺に覚えられません。

いやでも、覚えておいた方がいいの？

少しずつ冷静になってきた頭は、情報を整理しようと躍起になってフル稼働中。

……また卒倒したりしたらどうしよう。

好きなことを考えたりしたりするのは苦じゃないけど、どっちかって言う、考えるより動く方が得意なあたし。

断じて理論派でも思考派でもない。

ついでに言うなら、食後のデザートのスウィーツとも言わない。

ああ、また思考が逸れちゃった。

残念なおつむだわ……。

「よし、出来たよ」

鏡の中のBBが、にこりと綺麗に微笑んだ。

出来たのか。

出来たのね。

……

……何か、少年みたい？

少年少女の若かりし思春期時代はとっくの疾うに過ぎたし、そんなことを口にするのも確かにおこがましいんだけど……
だけど……あれ？

何か、気のせいじゃなければ、若返ってない！？

「ヨリはあんまり造形が崩れないタイプなんだね」

こわい！

意図せずしてモノログと会話が成立しちゃってそうな、貴方のその発言がこわいよBB！

やめてよ、嘘でしょ、言わないでよ、お願いだから、

「馴染んでない内にしちゃったから、ちょっと副作用が出ちゃったみたいだね」

「やっぱりいいいいいっ！」

言わないでって言ったじゃない！

言っていないけど、言った！

頭を抱えて叫んだ木村ヨリ、二十九歳独身。

不慮の事故で——若返ってしまいました。

さてさて、今さらだけど、あたしはあんまり女の子らしくない。

ボーイッシュってわけでもないけど、友達曰く、女の子特有のねちっこさとかぶりぶり感とか、そういう可愛らしさが大幅に欠けているらしい。

そして乳のボリュームも大幅に欠けているらしい。

体も華奢と言えは聞こえはいいいけど、ガリガリで丸みもない。

初めてベリーショートにしたときなんて、「すごい！超似合う！ヨリ的ベストヘアスタイル！」と男女共に大絶賛されたくらいだ。

つまり、若い頃から少年のような外見だった。

キャップを被れば妹にだって、「お姉ちゃん、少年のようだよ」って言われたくらいに。

「まあまあ、昔話ついぞと思えば。人間の女の子は、皆、歳は取りたくないものだって聞くしね」

……何をさらっと言ってんの。

ばちんとウインク決めれば、大抵のことは許されると思ってんの？

これだから美人はやあね！

偏見じゃないよ、今のは！

「いいわけないじゃん！」

「どうして？」

「どうしてってか。あのね、少なくともあたしは、二十九歳の自分が気に入ってたの！煙草も吸えるし酒も飲める！自分でお金も稼げるし、好きなこと出来るし！」

「セックスも出来るし？」

「……」

淫魔族って、頭の中セックスしかないの？

「大人なヨリもよかったけど、そうだね……発展途上のヨリも、背徳感をそそられていいかもね」

発展途上に戻したのはお前だ。

B B から、紫色のオーラみたいなのがぼわんと立ち昇るのが見えた。
何、あれ？

すっと顎を取られ、肩から腰へと滑った手が、ゆるゆるとそこを妖しく撫でる。

トップスの裾からするりと侵入しようとしたB B の左手と、目の前の長い睫毛が伏せられたのは同時で――

で、

ガツ——ンッ！

「いだっ」

あたしが頭突きを決めたのは、直後だった。

短く呻き声を上げたBBはしばらくおでこを押さえ俯いていた。
そりゃあまあ痛かろう。

かく言うあたしも痛かった。

……結構、痛いな。

「……やっぱり魅了チャームが効いてない」

また使ったの？

もしかして、さっきの紫色のあれ！？
本当にやめてください、本当に！

むうつと睨みつけたなら、ぐいっと急に覗き込まれた。

「あれ、これはまた大変だね」

「……まだ、何か？」

「ヨリって何か特殊な力とか持ってた？」

「霊能力の類い含め、一切ないけど」

「そう……」

何、何なの、まだ何かあるの!?

もう本当にやめて、早くうちでビールが飲みたい!

今日は奮発して発泡酒からビールに格上げして買ったんだから。

黒ビールなんだから!

一人今さらな憤慨をしていれば、

「おい、まだか!」

バターンツと躊躇の欠片もなく、硬派くんがドアを蹴破って突入してきました。

「トリエーチ、お前は本当にデリカシーがないね」

「お前に言われたくはない!」

どんぐりの背比べだな。

どうやらよくやく名前の判明した彼、トリエーチはばつとこつちを向いて……

「……本当に女なのか?」

失言を投げつけた。

さっきの真っ裸を貴方は見てなかったの!?

ヒーロー5

ここまで。

結構展開早い気がしてはいるけど、話自体に展開はあんまりない。個人的な展開が早かっただけで……人外と致しちったよ、あたし……。

お陰様で、喚よばれた理由はぼんやりとわかったけどね。それしかわかってないし、それさえもぼんやりだけだね。

いいんだ、もう。
気にしないんだ。

生娘でもあるまいし、犬に一発噛噛まれたと思えば！

若返っちゃったのも、狐に抓つままれたと思えば！

……思えば、ね……。

脱力したあたしをあらうことか米俵担ぎで部屋を出たBBには、やっぱり、デリカシーは皆無と見たよ。

その見掛け倒し、ほんっと、どうにかしたらいと思うよ。

しかし。

「でっかいね」

「あそこが？」

やめなよ本当、その絶世の美女顔で。

やめなよ、ていうかやめてください。

「身長が。あたしちびっこだからさあ、羨ましいなあ」

見事に当たり障りなくスルーして、思ったことを口にした。そう、BBはでかった。

いくつあるんだろう……190以上あるんじゃないのかな。

「ヨリも、見掛けによらずすごくいい具合だったよ。可愛く啼くし、しがみついて離れないし、締めまりもいいよね。あんあん言っちゃってさ、あはは」

「……」

スルーしたじゃないか！

何故、わざわざ混ぜっ返すの！？

何故！！！！！！

下ネタは内輪の飲み会で充分なんです！

ああ、通路の人達の生温い視線が痛い……。

揺れる見事な真紅を間近で眺めること少し。担がれたままに、どこぞの応接室らしき場所に到着した。

「いらっしゃい、我らが生贄の最後の者よ」

穏やかながらもからかうようなハスキーボイスからは、すでに『ヒーロー』の言葉さえもなかった。

……本当にただの生贄だったらどうしよう。

未だ顔も見えない声の主に対峙したBBが、やんわりと溜め息をつく。

「やめてやってよ、共有が上手くいかなくて混乱気味なんだから」
「お前が失敗したとは、世の中にはまだまだまだ不思議なことがあるものだな」

おかしそうに笑ってるけど、あたしは笑い事にも冗談にも出来ません！

ひとこと言ってやりたくてぐいっと上体を反らして……

「む、無理……」

諦めました。

ああ、あたし、背筋弱かったつけ。
情けない！

「あ、ごめんね」

本当に思ってるんだか怪しい謝罪を口にして、BBは、あたしを正面に向けて抱え直した。
降ろす気はないらしい。

で、

顔を見てびっくり。

絶世の美少女が、くつくつと笑ってこっちを見ている！
あれ！？

ハスキーボイスじゃなかったっけ！？
貴女じゃないの！？

まん丸にした目でこれでもかってほど凝視していれば、BBにあっさり目隠しを食らってしまった。

「せっかくわたしを見ていたのに」

「目が腐るよ、ヨリ」

「ふん、嫉妬か。お前も所詮は雄だな」

「お、雄？」

魔族って、雄雌の判断なんだ！？

一応、不可抗力ながらも情報共有に勤しんでくれた……ええ、もう、そりゃあ勤しんでくれたBBのお陰様で、多少の知識ベースはあたしの中にある。

この世界イヴィーには五つの大国と、七つの小国が存在している。
中央を陣取るのがここ、タンジーナバロウ大国。
よりによって、魔族の国なんだって。

魔族の国が世界の中央を陣取ってるってどうなんだろう。

大国は後四つ。

一つ。

山脈と岩壁に囲まれた竜族の住まうドラゴラム大国。

何となく覚えやすいよね。

ドラゴンイメージのネーミング。

ただ、厳ついイメージしか湧いてこない……エウの国なのかな。

一つ。

森と泉、広大な草原を持つ緑豊かな妖精の住まうエルフェニア大国。
これも、エルフイメージで覚えやすい。

きつと綺麗なんだろうなあ、行ってみたいかも。

一つ。

深き森と多数の港を持ち、商業的にも発展を遂げた獣人の住まうベ
ットバビナスタ大国。

……獣耳付きってことかな？

ふわふわがたくさんいるならぜひに見てみたいけど、国名は噛みそ
うに長い。

一つ。

最後の大国は世界最弱と言われる人間の住まうヒューグ大国。

ここにはどうやら、あたしの同種がたくさんいると予想。

帰れなかったら、諦め半分で勝手にここにお世話になるつもりでい

る。

さて、ここであたしは思考する。

大国は五つで、共有された知識ベースデータによると、『生贄ヒーロー』はどうやら五人。

言わずもがな、BB、エウ、ディル、トリエーチ、そして何故だか召喚されたあたしのことだ。

予測してみよう、いや、してみたい。

BBは淫魔族、つまりは魔族ってことで、タンジーナバロウ大国代表？だとする。

エウは自分で竜族って名乗ってたから、ドラゴラム大国代表。

ディルはキンキラキンの色彩と現実離れたビューティーオーラから、この理屈で当て嵌めるなら妖精国エルフェニア大国代表としてう。

トリエーチは……見たところ、普通なんだよね。

ウルトラマリンブルー

群青色の髪色とか、ありえないんだけど、まあ、見たところ普通。

ヒューグ大国人間代表？

あたしは？

異邦人代表？

そう考えて首を捻った。

ベットバビナスタ大国代表はいないの？

「……ねえ、トリエーチってフルネームは何て言うの？人間でしょ？」

「私は人間などではない。トリエーチ・ポーリー、獣人だ」

絶句。

あ、あたしの膨らみつつあった妄想を返してください！

獣耳どころか、全然全くふわふわしてないじゃーん！

硬い！

硬いよ、トリエーチ！

それがこの世界の獣人だと言うのかトリエーチ！

「……トリエーチはベツトバビナスタ大国代表？」

ふと、おかしいことに気づいた。

おかしいことってのがすでにおかしいけど。

あたしがここに存在すること自体、すでにおかしいのだから。

でも、おかしい。

「国についての共有は問題ないみたいだね」

にこりとBBが間近で妖艶に笑う。

「生贄代表という意味なら、そうだろうな」

何てことはない顔でトリエーチが答える。

「ヨリが召喚されてくれたお陰ですぐに死ななくて済んだんだから、よかったじゃない!」

「ねっ!」と、場違いなほど眩い笑顔でディルが言う。

「予想外だったがな」

真顔でエウが相槌を打つ。

待って。

よくわからないなりに考えてみるから。

つまり、四人はそれぞれに人外であって、人間じゃないってこと。
生贄ヒーローは五人。

残るはヒューグ大国……人間代表の生贄。

「あ、あたしは……異邦人代表じゃなくて、ヒューグ大国代表の生贄って……こと?」

まさか——まさか、まさか。

「人間てのは狡賢いよね。自分達から生贄を出すのが嫌だから、わざわざ無関係な異邦人を召喚する。召喚が失敗するたび、他の生贄四人を無残に殺すんだよ。『剣』^{つるぎ}と相性が悪いからだって言ってるね」

B Bが肩を竦めて笑った。

——殺、す？

他の四人を？

「しかし、タトゥーナが人であると記されている以上、真の『英雄』^{ヒーロー}は人間であることに違いないからな」

エウの声がどこか遠い。

真の英雄？

人が……そんな、世界を呪うような人が英雄？^{ヒーロー}

「まあねえ。現に初めて召喚した異邦人が、これまた初めて剣を鞘に収めちゃったもんだから、それがベストだ！って思い込んでるし」

やっぱり、その眩いデイルの笑顔は、場違いな気がした。

「お前は第五の生贄英雄だ。^{スケープゴートヒーロー}お前の行動と結果如何せんに、私達の命が掛かっている。……忘れるな」

最後にトリエーチの無情な台詞が脳内をごわーんっと叩いて、

「……ふうー」

間拔けな声と共に、あたしは意識を手放した。

こんなとんでもハプンな予測は、当たらなくていいのに！

ヒーロー5（後書き）

トリエーチの名前はロシア語からの拝借です。

【トリエーチ】は【第三の】

【ポーリ（作中ポーリーと表記）】は【宿命】
だそうです。

大層な名前ですが、気に入ってます。

ファンタジーワールド

さて、または卒倒したあたしですが、理不尽な現状に目を覚ましたわけです。

「なっ……ひあっ」

「起きた？ ああ、いいよ、無理しないで俺に委ねて」

「な、にが……あっん！」

……言わずもがな、散々啼かされました。

起き抜けだっつうの！

委ねるも何も、合意をすっ飛ばしてすでに致しちゃってるって、頭の中どうなってんの！？

と思ってBBを引っ叩いたのは、それからおよそ三時間後のことであって。

「声が枯れてて何言ってるかわからなかったよ」

とは、引っ叩かれたことさえ気にも留めないBBの言葉。

淫魔族って絶倫なの？

そして傍若無人？

傍若無人で絶世の美女顔で、もしかしたら、ついでとばかりにとんでもなくチートとか？

チートは最近覚えました。

元いた世界で、完璧な人を友達がそう呼んでいたの。
ちなみに、そのときによくリア充って言葉も知りました。

ああ、俗っぽいあの世界が懐かしい！

いやね、ここも、少なくともBBは半端なく俗っぽいけどね！

……淫魔族ってくらいだし、あたしの精気でも食ってるのかな。

こーわーいーっ！！！！！

「で、どう？」

「美味しい」

「それはよかった。ただ、そこじゃないんだけどね」

自らの行為を正当化したいのか単なる気紛れなのか、腰砕けで動けないあたしに紅茶を持ってきてくれたBBが、苦笑を滲ませてそう言った。

まあ、最初からこういうところは優しい。

それが何故に、移動となると米俵担ぎなのかはわからないが。

「まあ、俺は大抵わかったからいいけど」

「何が？」

どうでもいいけど、何で全てを語らないかな。

わかりやすく簡潔に、まとめて喋って、お願いだから。

「情報共有。再度試してみたんだ。今度は上手くいってると思うんだけど、どう？」

「……他にどうにか出来ないの？」

普通に説明するとか、何かあるだろ、何か。

しかしながらBB曰く、ヒーロー5（戦隊ものみたい）に魔族から淫魔が選ばれるのは情報共有が可能だからで、所謂義務いわゆるみたいなものらしい。

異邦人からしたなら傍迷惑極まりない話だけど、淫魔的に、それは対したことはないらしく。

何でも、異邦人の精気は格別に美味しいんだとか。

……やっぱり喰ってた……。

でも、今みたいに普通に説明すればいいのでは？
と思ったけど、もう言うだけ無駄な気がしたので、それは何とか飲み込む。

あたしに大事なことは、如何にしてセクハラとパワハラと下ネタを躲し、無事帰還を果たすのかということだけ！

そしてその後の確認により、世界に体が馴染んだらしいあたしの情報共有は、今度こそ、上手くいっていたのでした。

「残念」

BBが呟いた言葉は、聞かなかったことにする。

場所は変わってさきほど担がれてきた応接室。

腰砕けなあたしは、やっぱり担がれてます。

やっぱり米俵で移動させられて、ここで肩に乗せられました。

肩にだよ。

どういう頭の構造してるんだ。

ハスキー美少女は結局、淫魔族の雄だったようで（情報共有の賜物） 名をゼルガスディ・ジャガール・バルボッサと言うらしく、

しかも、何と魔族の長だとか！

うおおおおっ、まさかの魔王様出現！

魔王様か……見掛けによらず厳つい名前だなあ。

魔王っぽいような気がしなくもないけど。

ファンタジーね。

緩やかな流れる川のようにウェーブを描くBBの真紅の髪とは対照的に、魔王様の髪色は淡い金色でドストレート。

それをハーフアップにしている、目は濃紫色、手足はおそろしく白く、やっぱり黒いロングワンピースみたいなものを着ている。

……どう見ても、十七、八歳程度の美少女。

もう、見掛けには騙されないようにしよう。

如何に美しい面の皮でも、一枚剥げは、皆、淫魔！

これを今日より、教訓にしたいと思います！

「で、だいたい理解したのか？」

やっぱりハスキーボイスな魔王様。

馴れちゃえば、このギャップは意外に絶妙なのかもしれないけど……

「……お陰様で」

現在あたしは、BBの右肩に座っているわけで、頭上高くから魔王様を見下ろしている。

誰も突っ込まないけど、これ、ありなの？

大丈夫？

突然「無礼者があつ！」とか、ぶち切れたりしないでくださいね！

あたし、普通の異邦人なんで！

対魔力戦とか無理なんで！

あたしの思考がどうであれ関係ないらしい魔王様以下従軍は、あれよあれよと話を展開していく。

そっちの勝手な都合で召喚されたあたしは、最初からずっと置いてけぼりだ。

そう、本当の最初っからね！

「で、いいか？ええっと……」

「ヨリです。木村ヨリ」

「ヨリ……ヨリか、わかった」

魔王様はあんまり覚える気もなさそうだけど、まあいいか。

そんなこんなでつまり、旅仕度は任せとけ！

三日後には出発しろ！

ってことでした。

で、

帰れるの？

帰れないの？

獣人はやっぱりあれなの？

ふわふわしてないの？

竜族ってやっぱりドラゴンのものなの？

変身とかしちゃうの？

ど う な ん だ ！

異論は山とあれど、魔王様の無言の威圧の前に、言わずして塵と散ったのでした。

B B、腰を摩るのはやめて。

で、翌日。

至れり尽くせりでご飯はそりゃあ美味かった。

どうやら魔族だろうが獣人だろうが、普通に食事をすることは可能らしい。

エウ曰く、

「人型を持つ以上、人を真似て暮らすこともあるからな」

だそうで。

それはつまり、食べなくても大丈夫ってこと？

そしてまたつまり、やっぱり変身しちゃうということ？

ふと湧いた疑問をBBに悟られると厄介なので、デザートが運ばれてくるまでに、無理矢理詰め込まれた知識ベース^{データ}を何食わぬ顔で漁る。

ここ、世界の中心であるらしいタンジーナバロウ大国は、言わずと知れた魔族の住まう国。

魔族は闇に住まう者——というイメージ何のその、普通に朝と昼もあれば、他国から勇者が攻めて来るようなこともなければ、普通に国交もあるそう。

ただ、ヒューグ大国との仲は水面下でのいざこざは付きものらしく、表面上上手く誤魔化していると言った感じだそう。

……何か、曖昧な情報だな。

魔族とは、大まかに三つの種類に分けられるらしく、魔人、魔獣、魔物の順に、強さと知性は下降する。

魔王様とかBBは魔人レベルで、つまりは魔族の中でもその他を押し退け統べる上位魔族だということ。

魔人レベルで、ようやく人型を持つことになるそうナ。

魔族はもともと精気を糧に生きているので、人のような食事は不要だけど、単純に美味しいと思うから食べる者が多いらしい。

趣味みたいなもの？

エウが属する竜族は、まさしくドラゴンそのもの。

知識ベースが引つ張り出してきた見たことも聞いたこともない謎の本の挿絵が、ぽんっと頭に浮かぶ。

どうやら変身後の姿は、東洋の竜と言うより西洋の竜の姿に近いらしい。

変身後……いや、それとも本来の姿がそっち？

エウが着ている服は、どっちかと言うとチャイナドレスっぽいんだけどなあ。

で、これまた食事自体は基本的に摂らなくてもいい構造で、竜族に至っては自然の生気を糧にしているそうナ。

ただ、ドラゴラム大国は自給自足で畑なんかも耕しているそうだし、家畜もいるらしい。

そして、一番興味津々なのが、獣人の生態！

さあ、がんばって知識ベースデータ！

あたしの想像を裏切らない成果を見せて！

ベツトバビナスタ大国の情報が、ぱぱっと頭に浮かぶ。

……すぐ頭がよくなったような勘違いに陥りそうでこわい。

獣人ていうのは、所謂 亜種、亜人と呼ばれる種族なんだそうだ。
魔族や妖精族、竜族なんかと人が混じって生まれた人達。

ハーフだと獣人になる確率が高いらしく、他と比べて国の歴史も種族の歴史も浅い。

魔族との混血の場合、魔力値が高いと魔族の方に属する場合があったり、竜族との混血は竜体に変化が可能ならそちに受け入れられたりもするらしい。

ただ、妖精族との混血は妖精としては半人前にしかならないらしく、獣人に属することがほとんどだそう。

けど、人間より圧倒的な体力と知力、能力を誇り、1.5倍の寿命でもあるらしい。

で、肝心のふわふわは……

「……やった——っ！ やっぱりいるんだ——っ！」

「何が？」

思わず歓喜の声を上げたところで、BBに、最もな疑問を投げられました。

あ、デザート来てた。

ところで。

妖精族の国エルフェニアの情報がほとんどなかったのは、どうしてだろうか。

ヒューグ大国については、心象が悪かったからか、特に興味は湧か

なかった。

自分達から犠牲を出したくないから異邦人を喚ぶって、しかも、それが上手いかなかったら他の人達を殺すって……。

いくらあたしが楽観的に生きてきたと言っても、それがよくないことだってくらいの分別はつく。

まだ、ことの次第がはっきりわからないから、今は言及しないけど……。

何はともあれ。

淫魔になすがままにされた上担がれたり、魔王様を上から眺めたり、デザートもすこぶる美味しかったり、いろんな人達が暮らしていたり。

どうやら、思っていた以上に、この世界はファンタジーなようです。

……で、済めばいいけどなあ。

デビル・ザ・ナイト

現在、括^くられてます。

「どこに？」って聞きたいじゃない？

聞きたいに決まってる、人とはそういう生き物だから。

わかってる、あたしはわかってる。

だから、声も高らかに教えてあげます。

——丸太にだよ！

「ダンダライーヤーダンダラヤー、ダンダライーヤーダンダラダラダラ」

踊ってます。

目の前で、なまはげみたいな仮面を付けた謎の部族達が。謎の歌詞を恭しく歌い上げながら。

ねえこれ、もう、どうしたらいいの。

どっから突っ込んでいいかわからないんだけど。

なまはげならなまはげらしく、出刃包丁持って「わるいごいねがー！？」でいんじゃないの？

そっちの方が、やりたいことがわかりやすいと思うよ。

「ダンダライーヤー」じゃさあ、括り付けられてる側としても、反応に困るわけ。

何となくわかるけど、それはそれで、やっぱり反応に困るわけよ。

だって、わかりたくなんかないじゃない！

またも混乱状態で、自分の思考回路さえセーブ不可能だ。
もしや「ダンダライーヤー」ソングは混乱呪文か!?

「ダンダライーヤーダンダラヤー、ダンダライーヤーダンダラダラ
ダラ……イヤ!」

バツ!と素っ頓狂なポーズを決めて、謎の部族達による謎の演目は
終了した。

「イヤ!」は決め台詞だったわけね。
噴かなかった自分を褒めてあげたい。

猿轡嵌められてる状況は、ある意味、功を奏したと言って過言じゃ
ないのかもしれない……そんなわけあるか!

「呼んだか」

「ぶっ——んぐっふっ」

功を奏しませんでした。

猿轡嵌めた状態で噴き出そうとすると、噴き出した反動で若干前傾
姿勢になるので、口の端に丸太ごと縛られた縄が食い込んでものっ
そい痛いです。

もうしません、我慢します。

だって、突然何処いずこより登場しましたこの人、「呼んだか」って言
ったよね?

ダンダライーヤーソング (命名) は混乱呪文ではなく、この人を

呼ぶための召喚ソングか何かってことでしょ？

あたしだったら、あのソングで呼ばれたくない！
末代までの恥にもほどがある！

「お前が異界より召喚された生贄か」

……ああ、この人も生贄って言った。

ヒーローはどこに行ったの、生贄ヒーローが正式名称じゃないの？
そもそも、生贄とヒーローを一緒にしたにするのが間違いだと思うけどね！

現状では生贄で間違いなさそうだけど。

ダンダライヤーソングで呼ばれたらしい彼は、真っ黒なロングのフードコートを着ていた。

顔は見えないけど、刺さるような鋭く冷たい声をしている。

その彼が、ぱさっとフードを取った。

……これはまた、BBやデイルとは違う、ずいぶんと冷涼な美形だ
こと。

エウも涼しげな美形ではあったけど、割りと逞しい男性的な感じだった。

それよりもっと線が細くて、ナイフみたいで、中性的だ。

彼は一通りあたしを舐めるように上から下まで観察して、ふっと、
嘲笑いながらこう言った。

「私はダンダライヤー・ダン・ダラヤ。拝めたことを光栄に思え」

あたしはまた、噴いた。

——遡ること数時間前。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫です」

「だけど、」

「結構です」

「でも、」

「結構です」

「やっぱり」

「結構だっつつってんだ！」

散々一緒に寝るんだと聞かないBBを押し退けて、あたしはようやく平穏無事な夜を手に入れた。

「ええー、やろうよ」

何をだ！

ドア向こうからした言葉に思わず言い返したくなったけど、敢えて無言を貫きやり過ごした。

構ったぶんだけ攻防戦は長引く。
スルーに無視が一番！

どうやら、鍵を掛けなくても入って来る様子はない。
BBはね……他は知らんが。
鍵、付いてないけどね。

そんなわけで安らかにベッドで爆睡してたのだ。

——で、今に至る。

何これ、特に説明とかいらないうな……。
言うか、攫われたなら攫われたで、何で起きなかったかな自分！
ウェイクアップですでに丸太に括られてたって、どういことだよ！
それ以前に、BB達は何してんの？
勝手に召喚したんだから、もっとこう、責任持って欲しい！
謎の演目を終始見せられたあたしのいろいろと複雑な心境をどうしろと！？
てか、この人どうしたらいいの！？

「ふん、あまりの恐怖に声も出ないか」

猿轡外してくれたらレスポンスは可能なんですけどね。

「お前がいては困るのでな。……まあ、察してはいるだろうが」

やっぱり、そういう流れ!?

どうしよう……台詞に全く捻りもなくそなければ、結果までがお決まりのものらしい。

こういうところはセオリーなんだ……最初はあるんだったくせに。

ダンダライーヤーは薄く嘲笑^{わら}ったまま、謎の部族に支持を出す。

「燃やせ」

わああああ!

だよね、やっぱりそうだよね!

足元にやたらと藁とか小枝とか盛られてるもんね!

ど——しよ——っ!?

「ふむむほへふはい! (ほんとごめんなさい!) ほふははははいはは! (もう笑わないから!) いいははへはほほほふはらーっ! (いい名前だと思うからーっ!)」

あたしはテンパっていた。

混乱と恐怖真っただ中だった。

ゴツツと鈍くも響く音がして、ドサツと何かが倒れる音、それから、謎の部族 (この人達は何なんだ) がどよめき出すまで、目を瞑っ

ていたから。

「また君か」

「……—?」

……聞いたことある声だな、と思って、そっと目を開ける。
まだ足元は燃えていなくて、そこには――

「お待たせ」

にっこりと場違いに妖艶なる笑みを浮かべた美女――もとい、BB
が、ダンダライーヤーを足蹴に、鉄パイプを持って立っていた。

ごめん。

やっぱりいろいろ、どうかと思うよ。

「いやあ、まさかダンがこんな行動に出るとは思わなくて。まあ、
実行したのはダンの下僕達だけど、完全に隙を突かれたみたいだね」

丸太から下ろされたあたしは、猿轡を外してもらいながら怒りマツ
クス。

気絶したダンダライーヤーがBBに片手で引き摺られてて大変なこ
とになってはいるけど、そんなのは自業自得だ。

今なら限界突破で9999のクリティカルヒットが出せそうだよ！

「何、隙って！あのね、勝手に召喚したんだから、警備とか保護とかそこんとこちゃんとしてくれないと困る！生命の危機とか困る！」
「まあ……でも、なかなか笑えたでしょ」

生命を賭けた笑いはいらないから！
いや、笑っちゃったけど！
不可抗力で異議なし！

ちなみ、謎の部族はやたらとおとなしくなってはいるけど、目がちよつと危ない。

たぶん、BBの魅了^{チャーム}にやられてる。

薄ぼんやりと紫色の靄^{もや}が漂っているのが、何よりの証拠だ。

「そんな怒らないで。ヨリもよくなかったんだから」

「あたしが？何で」

「一緒に寝ればよかったんだよ」

「やだ」

即却下。

「……やっぱり、魅了^{チャーム}が効いてないね」
「あたしにまで掛けたの！？また！？」

だから嫌なんだ！と言おうとしたなら、先に口を開かれてしまった。

「追い出された後、ヨリの部屋に結界を張ろうとしたけど無効化された。いろいろ試してはみたけど、全て効かなかったんだよ。で、ドアを開けたら、すでに攫われた後だったってこと」

その短時間で爆睡の域に到達出来る自分がすごい。

「……結局ドアは開けたんだ……」
「まあね」

選択肢は最初から『犯^ヤられる』か『殺^ヤられる』しかなかったらしい。
……何故この二択。
奇跡の『無事生還』コマンドが出たので、終わりよければ全てよしにしよう！

何とかイベントを自分的に消化しようと奮闘しているうちも、BBは説明が続けている。

「だからつまり、ヨリは『無の魔力』持ちだってことだね」

無の魔力？

ああ、何か最初にそんなこと言ってたような。

無の魔力、無の魔力——知識^{データ}ベースを無言で漁る。

『無の魔力』——全ての魔力を無効化する魔力。

ガ——ン！

召喚されてから二度目の金だらい落下が見えた気がした。

「何、無効化って……結界も無効化されちゃうなんて、何て使えない魔力！」

「だから一緒に寝ようって言ったんだよ」

「違う！BBは『やろう』って言ったの！」

「どうせ一緒にいるからね」

落ち着かせるために頭を撫でてくれていただろうその手の動きが、微妙に妖しくなってきたので、バシッと叩き落とした。

もうやだ！

まだ二日目なのに、この仕打ちは何！？

「うーん……わかった。今日はしないから、おとなしく一緒に寝て？」

「ね？」といたずらっ子みたいに微笑まれて、少しだけ、BBが素敵に見えてしまったのは、きっと、何だかんだで助けてくれたからかも……しれない。

小さく頷いたあたしをまたもや米俵担ぎして、片手には鉄パイプ、足でダンダライーヤーを踏み付けたまま、BBは一瞬にして、お城

に帰還したのでした。

流石は上位魔族。

鉄パイプは忘れよう。

ようやく本当の安眠を手に入れたあたしは、ダンダライヤーについて、すっかりさっぱり忘れ去っていたのだった。

ノンパレイルキッチン

翌日朝、魔王様に呼ばれてあの美少女面を拝見して、ようやく昨夜のトンでもハプンを思い出したあたしは、それやあもう抗議した。魔王ゼルガスディは「ふうん、そうか」と素っ気なく言っただけで、労わりの言葉とかは特になかった。

興味ないにもほどがあるでしょうよ。

あたしが起きなかったのも悪いが、それ以前の問題でしょうよ！それでも挫けず抗議しまくったら「だから、BBと一緒に寝ると言っただろう」と、射殺さんばかりの視線で言われ、強制終了。

魔王様、血も涙も興味も皆無。

何なの、あたしは重要な生贄ヒーローじゃないのか。
死んだら困るだろ、あたしも貴方達も！
いや寧ろ生贄だからいいと言うか！

憤慨冷めやらぬあたしにBBが苦笑を漏らす。

「あれでもゼルは心配したんだと思うよ」

「どこが！」

「普段なら一言だって話さずに目で射殺して終わりだから」

……目で、本当に射殺せるんだ？

これ以上は恐ろしいので、いろいろと黙殺して強制終了。

で、今。

突然ですが、旅立ちを迎えている。

昨日の今日で？

ねえ、あの、本当に魔王様、あたしのこと心配してた？

攫われたのって昨夜だよな？

乙女に対してこれは、あまりに配慮がなさ過ぎではないの、ねえ？

……まあ、しつこいしもういいや。

よくわからんが、剣を鞘に収めないと帰れないんだもんね。

やりますよ、やるやるーあたし超がんばっちゃう！

……で、何するわけ？

「ヒーロー御一行出立！開門！」

仰々しく高らかな声と共に、そびえんばかりにどでかい門が、ギイ

——ツと開く。

外に出たのが誘拐以外になかったからあれだけど……何か、魔城って感じじゃないんだね。

もっところ、おどろおどろしいデザインなのかと思ってた……イメージカラーは黒と紫、蜘蛛の巣はデフォルメです、みたいな。

そう言えば、城内も白と木目ベースで小綺麗だったな。

案外、普通。

存外、落胆。

RPGのボスキャラの城をイメージしていたのに。

もつとあたしを落胆させたのは、ある意味想像通りの活気溢れる城下町だった。

所々街道に沿った植え込みは綺麗に切り揃えられているし、大通りは馬車（馬らしき生物が引いているから）が通りやすいように歩きやすいようにか、石が敷き詰められている。

建物はレンガ造りで、結構普通だった。

本当、西洋の街並みみたいなイメージ。

活気、超溢れてる——『人』がないけど。

爬虫類っぽいけど二足歩行で人語を解する謎の生物から豚っぽい生物（獣人とどう違うの？）から兎の耳をくつつけた……でも顔はライオンで尻尾は蛇の生物などなど、バリエーションは幅広く揃えているように。

ときどきやたらと美人が混じってるんだけど、あれが魔人かな。

その隣を歩いてる男（雄？）があきらかにもう人型じゃない何かなんだけど、魔人さんは頬を染めてはにかんだりするから、まあ……いいのかな……趣味嗜好は本人の自由ということで。

そんなわけで、あたし達ヒーロー御一行は出発したのである。

「え、もう休憩？」

「休憩ではない、今夜はここ、ノンパレイルキッチンに一泊する予定だ」

魔王城を出て訳一時間、がったんと馬車が止まったのは、城下町ど

真ん中のとあるお屋敷前だった。

休憩かと問えば、全く表情の変わらないエウに即座に否定される。されたうえ、仰天の事実がその口から飛び出した。

「は？え、一泊？ここに？」

「そうだよー。ここはね、いろいろ揃えるのにちょうどいいんだ」

にこつとキンキラ王子デイルが無邪気に笑ったけど。

いや、いやいやそうじゃないだろう。

さっき出たばっかじゃねえか！

——で、

「待って、さっき何て言った？」

「いろいろ揃えるのにちょうどいいって」

かくつとデイルが首を傾げるが、聞きたいのはそこじゃない。

「その前」

「休憩ではない」

エウが淡々と答える。

お前の表情筋は飾りか。

それはまあいい。

違う、そこまで遡らない。

「その次」

「ノンパレイルキッチンに一泊する」

「ノンパレイル……キッチン、だど？」

「この城下町の名前だけど、どうかした？」

せつせと馬車から荷物を下ろしに掛かっていたBBが、あたしに視線を投げた。

——魔王城の城下町が天下の台所ノンパレイルキッチンって、どういことだ！！！！！！！

「ネーミングセンス皆無！」

「うるさいぞ！さっさと降りろ！」

トリエーチに引きずり降ろされながらも、あたしは納得出来なかった。

てかあんた、マジであたしのこと女と思ってないでしょ！？

ノンパレイルキッチン（後書き）

ノンパレイルキッチン

和訳／天下の台所、または無類の台所（都市）

という意味。

≠？

そこはおどろおどろしいお屋敷だった。

魔王城で期待したデフォルメそのままに、+αでとにかく日当たりがよろしくない。

鉄格子が嵌められた窓は、重厚なカーテンの隙間からは割れたガラスが覗いている。

ギアアギアと謎の黒鳥が鳴き喚き……ちよつとでか過ぎだろ、あの鳥、怖いんだけど。

とにかく、魔族の住まう国のイメージそのものを凝縮したかのようなお屋敷だった。

「ち、ちよつと、何ここ、こんなとこ泊まるなんて無——」

「や……やあやあ、よ、よう、こ……そ……わ、我が屋敷、へえええ……ぐええっほ！げっほ、げっほ！」

「旦那様！ご無理はなさらずにとあれほど……！」

「だ、大丈夫……じゃ、けえ……ゼーゼー」

あきらかに大丈夫じゃなさそうだけど。

某沈没豪華船映画さながらな中央階段（でもおどろおどろしい）

からえっちらおっちら降りてきたお爺ちゃんが、ゼーハー言いながら使用人らしき青年に止められていた。

咳き込んだりしてるけど……掃除しないからじゃない？

持病持ちなら、ハウスダストも気にした方がいいと思うよ。

否定の言葉を遮られたことより、お爺ちゃんに興味が行ってしまった。

腰痛なのか年なのか、ぱっきり二つに折った腰、ついた杖は腕力さえ弱っているのかカタカタと震えていて、うっかりすると持つてない方が安全なんじゃないかと思わせる。

薄っすらと残ったロマンスグレーを何とか無理矢理後ろに撫でつけ、自宅らしいのに着ているのは燕尾服。

ついでに、使用人らしき青年が着ているのも蝶ネクタイ付き燕尾服。皺々の顔は日に当たっていないからか真っ白で、蓄えたロマンスグレーの髭は小綺麗にデザインされており、それが何だかアンバランスだった。

たぶん、背は低くないと思うんだけど……てか、青年はやたらとこれまた美形であらせられること。

魔人か？

てことは、彼をお抱えにしているお爺ちゃんも魔人？

魔人で、お爺ちゃんもいるの？

と、ここでエウがついと前にでる。

何何、もしやエウも負けず劣らずハウスダストに弱くて一言物申すとか？

おう、言っちゃれ！

「久しいな、ドラキュラ伯爵」

「……」

予想を斜め上行く発言に、ガ——ン！と、またも金だらい落下が見えた。

現在、あたしは応接室で茶をしばいております。
ここ——ドラキュラ伯爵邸で。

「す、すまん、のううう……わざわざ、ざ、げーっほげほげふっ……あーっとお！ツカー、ぺっ！」

「旦那様、絨毯に唾を吐かないでください」

「おお……す、すまん、のー」

お爺ちゃん、最後まで喋れてないよ。

さて、言わずもがなドラキュラ伯爵と言えば、15世紀のルーミアの領主であり別名串刺し公と呼ばれたヴラド・ツェペシュをモデルに、イギリスのアイランド人作家、ブラム・ストーカーが書いたホラー小説が有名だけど……

「して、皆様、は……あ”——っ、げっほ！」

だけど……

「如何し、て……ごっほうえーっほ！」

だけど……

「こちらに、いらっしゃった、の……でええっほ、げっほ！」

「わたくしが変わってお話させていただきます」

その方がいいね、異議なく満場一致だしね。

だけど、ドラキュラ伯爵ってあんなんだったの？

まあ、世界が違うわけで、たまたま名前が同じだけかもしれないけどさ。

でも、ノンパレイルキッチンがあるなら、ドラキュラ伯爵がいたって別にね。

おかしくはないように思うんだよね。

ドラキュラとか言ってたってお爺ちゃんだし、てか、何でもあるんでしょ、きつと。

上手く(?) 翻訳されてるだけかもしれないしね。

ドラキュラお爺ちゃんについては、敢えて知識ベ^{データ}ースも漁らないことにした。

と、ここでまたもやエウが口を開く。

「現魔王から通達があったと思うが、届いていないだろうか」

と、答えるは美形青年執事。

「はい、届いております。ヒーロー御一行様を一泊と、装備諸々の準備でございますね。しかと、承る所存にございます」

と、ドラキュラお爺ちゃんが。

「え、ええ、そうなん……ジークア、お主、そ、そんなこ……げーえっほげほ！」

「お部屋はすでにご用意してあります、エウ様」

お爺ちゃん、普通にスルーされてるけど、旦那様じゃなかったのか。最初の方こそ心配されてる様子だったけど、後は微妙に（かなり）蔑ろにされている。

威厳ナシ、ドラキュラお爺ちゃん。

もうお休みになられたら如何かと、進言したいくらいの扱いだ。

いろいろ今さらだが、ふと、湧いた疑問を口にした。

「あのさ、準備って、魔王様がすでにくれたんじゃないの？」

だから出発に三日も要したわけでは？

／＼パレイルキッチン
すぐその城下町に一泊する意味が見出せず首を傾げたなら、あまりにさらっと、BBが答えをくれた。

「あのゼルがそんなことするわけも出来るわけもないよ。彼はね、無類の怠慢魔王なんだ。ここの宿泊許可願いを直々に書いただけでよく働いた方だよ」

「だな」

「だね」

「魔力と容姿だけの魔王だと聞いてはいたが、あれは本当だったのか」

続いたエウ、ディルは魔王様の実態をどうやら知っていたらしい。最後のトリエーチに限っては、呆れついでに眉を寄せていた。

上記の様子から推測するに、タレンジャーナバ魔族は竜族、エルフェニア妖精族とは、どうやら国交が盛んらしい。

ベットパレヒナス獣人族とは、噂が及ぶ程度ってことだろうか。

BBは魔王様をゼルと呼ぶけど、結構深い仲ってこと？

それとも、あたしが常識とするような主従関係と魔族のそれは、ちよつと違うのかな。

ここで出番の知識データベース――

「ああ、俺とゼルは幼馴染なんだよ。生まれた時期が一緒でね、彼が魔王に就任して、俺は補佐官の役割を与えられたんだ」

……せつかくの知識データベース、出番ナシ。

いやいや、まだまだ！

さつきからほら、何故かドラキュラお爺ちゃんとエウは顔見知りっぽいし？

そこを漁って――

「ちなみに、ドラキュラ伯爵は我らが竜族の血を引いている。格はわたしが上なので、魔王の手紙に一筆添えたのだ」

エウがすかさず補足説明までしてくれた。

「……あのさ、」

「どうした」

表情筋という言葉が辞書にないエウに、「……何でもない」と言うしかなかった。

情報共有、本当に必要だった？

ねえ、必要じゃなくない？

……あれ？

「えっ？ドラキュラお爺ちゃんが何だって言った？」

「竜族の血を引いている」

え。

「えええええ——っ！！？！？、て、ちょ、腰を撫で摩るな！」

何故かこのタイミングでさわさわと動き出したBBの手を叩き落とし、それでも驚愕は止まらない！

BBの厭らしさ全開な艶笑も止まらない！

止まらないよノンストップ！

BBのにやにやは止まれ！

じ、じゃあ、お爺ちゃん（ドラキュラ省略） 竜になれちゃうの！？

いや、なれなかったから魔族にいるのか！？

タンジーナバロウ

「旦那様は竜族とのハーフでして、竜型は中途半端以下だったのですが——それにしてもずいぶんと今回の異邦人の方はお若いのですね——魔力は高く——おいくつですか？未成年？——よって、こちらに屋敷を構え、奥様と一緒に世話に——と言うか男子？女子？——なっている次第でして——BB様のお手つきですか？女子でしたらすでに処女ではないですか？——わたくしも同じく竜族の血を引いてはいますがクォーターでして——それにしても幼いですね——竜型は取れません」

「……そ、そうなんだね」

ジーヴァと呼ばれていた青年執事が、いろいろだだ漏れ状態で話してくれた。

初対面でこれだけ失礼にだだ漏れたのは、人生初だったよ。

失礼だけなら三日前に経験済みだけど、あれはドストレートだった

からなあ……現在進行形だよちきしょうめ。

「最初から処女おとめじゃなかったらしいよ」

何故このタイミングでデイルはそのレスポンス選択したの、ねえ！？
キラキラエフェクト掛けてりやいいってもんじゃないから！
いっつも必要なことは言わないくせに、本当、下ネタだけはレスポ
ンス最速だなこいつらは！

こいつらは！！！！！！

——そして、衝撃の事態まで、後数時間。
ということに未だ気付くはずもなく、ただこの時は「いつ旅は始ま
るんだ」と、BBの手をまたもや叩き落としながら考えているのみ
だった。

お爺ちゃん、寝落ちしてたけど。

≠？（後書き）

ドラキュラ

ルーマニア語／『竜の息子』という意味があり、また『竜は悪魔』
という意味もあるらしい。

エブリバディ、ホラー

ここまで来るのに神経を擦り減らしたあたしは、たぶん、間違っていない。

「お部屋はこちらです——どうなさいましたか、ヨリ様——本当に女子おなごなんですか？——とにかくこちらになります」

失礼の大盤振る舞い——もとい押し売り一方なジーヴァの口は止まることなく、三階最奥の客間に到着するまで続いた。

それだけならまだしも、ここに来るまでの道中のそれはそれは珍妙なこと……珍妙って言うか、もうホラー。

「客間にお連れするまでを楽しんでいただこうと、日々、旦那様が趣向を凝らしております。あ、こちらが彼の有名かな鉄アイアンの処女メイデンでして、あちらは吠える雄牛、その先は審問椅子で別名祈りの椅子とも呼ばれています——」

うんたらかんたら、と。

「滅多にお客様などいらっしやらないので、わたしも初めて解説させていただきました」

にっこりと満足気に笑って言ってたけど、そういう問題じゃないと思う。

「まあ……誰も来ないだろうな」

若干青褪めた顔でトリエーチがそう呟いたのをあたしは聞き逃さなかった。

あたしも青かったけど……。

趣向の凝らし方をもっとさ、こう、ポジティブな方向にしてみたらどうだろうか！

客間に到着するまで延々拷問器具見せられるって、泊まったら最後殺^ャられるんじゃないかって思うよ！？

超笑顔で『吠える雄牛』とやらを解説されて、どう切り返せと！？

「いやあ、流石はドラキュラ伯爵。いいものを見せてもらったよ」

「ねーっ、僕感動しちゃった！」

「それはよかったな」

……何かを超越した方々がいらっしやるようですが。

BBは魔族だからまだわかる、まだ、まだね。

でもさ——デイル、君ね、それは妖精族の看板背負ってる身でどうかと思うよ！

妖精なんですよ！？

イメージ商売じゃないの！？

聞きたかないけど、どこに感動したわけ!?

エウに限っては、その動かない表情筋云々はもう何も言わないからね!

言わない、絶対に!

「大層お気に召したご様子ですが、エルフェニアにも、こういった拷問器具があたりで?」

日当たりがよければきつと豪奢で素晴らしいであろうドアに鍵を差し込みながら、ジーヴァがデイルに問い掛ける。

君、何つう質問を。

エルフェニアにあるわけなからうが!

……ない、よね?

こわくて知識^{データ}ベース漁れない……!

「うちは大抵、焼き殺しちゃうから」

「……え、焼き殺……?」

「ああ、妖精族は刺しても刻んでも首を落としても死なないのでしたね」

「刻……首を……何……?」

「そー!うち、皆丈夫だからね!」

ジーヴァに答えながら、デイルはきやらきやらと笑っていた。

……笑いごとなの!?

より青褪めたのがあたしとトリエーチだっけだったことは、言うに及ばない。

そうこうしている内にドアは開かれ、目の前には、意外にすっきり爽やか日当たり良好、豪華素敵な大部屋個室が。

……大部屋個室？

つまり、大きな一部屋、と言いたかったわけで、窓際にはテーブルセット、その向かいにど——っん！と、そりゃもうでっかいベッドが一つ。

でっかいベッドが一つだと？

「あの、ジーヴァさん」

「ジーヴァとお呼びください、ヨリ様」

「はあ……あの、この部屋って」

「ああ、大丈夫です。防音魔術は万全ですので、ご心配には及びません」

「え？あの、防音？いや、あのさ、違う部屋とか」

「では、ごゆるりと」

ばっちり全てを遮った彼は、にこつと超絶スマイルかまして、颯爽と燕尾服を翻し去って行った……行っちゃだめだろうが！

何、どういうこと。

急な展開に、思考回路が追いつきません。

雑魚寝？

——ああ、雑魚寝ね！

なあんだーヨリ、超絶びっくりしちゃった★

修学旅行とかでさ、結局大騒ぎしちゃって布団なんて関係ないみたいな感じで適当に寝ちゃったり——友達のアパートに大勢で押し掛けて酒に飲まれてその辺で寝ちゃったり——なあれね、あれ！

あれだよね、あれだろ、あれだろうな、あれ雑魚寝以外の異論は認めん
！！！！！！

「驚愕してるとこ悪いけど、一応、説明しておこうか？」

「聞きたくない」

「聞かなくていいの？ヨリ、ちゃんと『生贄イタヒーロー』について知デ識ベース確認してないでしょ？」

「……」

してないけど、聞きたくないです……聞きたくない！

いやいやでも、でも、だが！

万が一ということもあるよね！

気を取り直し、BB以下従軍（誰の？）に向き合う。

あ、何かトリエーチが嫌そうにしてる時点で、悪い予感しかないのは何故だ。

そして、BBの説明が始まった。

「ヨリは異邦人だから、まず、俺と交わることで情報共有含め、こ
っちの世界に馴染む必要があったんだ。これはもうわかってるよね
？」

「……まあ」

ついでに体は未成年にもなったけど、それはもう犬に噛まれたことになったので。

「取り敢えず座れ。ディル、お茶でも用意してやってくれるか」
「わかったー」

促されるまま椅子に座り、BB、エウ、トリエーチと順にテーブルを囲む。
備え付けオープンキッチン（？）の先では、ディルが茶葉を選別しているのが見えた。

「でね、俺達五人が何故『生贄ヒーロー』と呼ばれるのかだけど」
「剣と鞘がうんたらとかに関係してるんじゃないの？」
「タトウーナ伝説ね」

BBの訂正はさておき、それが理由じゃないのか。
じゃあ、何が理由または由来なんだ。

「全てはその伝説に関係している。タトウーナを裏切ったのは誰だった？」

「えーっと……」

誰だったっけ？

エウの問いに、知識を漁る。

——あれだ、あの恋に落ちたとか言う——

「傭兵アウゼンベルグ！」

「そうだ。彼は絶世の美青年であつたらしい」

「絶世の美青年……美青年、ね」

「つまり、タトウーナは美形に弱かつたんだろうね」

へえ……タトウーナも所詮は女だったってか。

それで剣になっちゃった（？）わけだしね。

まあ、美形嫌いな人なんて、なかなかいないもんだらうけど。

それがどう関係しているの？

首を傾げたあたしにBBはさりとこ言うった。

「生贄ヒーローってのはね、生まれつきタトウーナの呪詛を受けてるんだ。だから、身内としかセックス出来ないし愛せない」

——は？

「この場合、身内と言うのは生贄ヒーローの中でということになる」

何、冷静に語っちゃってるのエウ。

「過去、ヒーロー達の中に女が一人以上いたという記録は……ない……」

尻すばみしないでよ、トリエーチ！

ついでに嫌そうな顔はいい加減やめて！

——ん？

つまり、身内でしか体も気持ちも含めいろいろ出来ないわけで、過去、女は常に五分の一だったと。

おや、何だか急に現代的俗っぽい話に……

「……BLアリってこと？」

問い掛けが恐る恐るになるのは仕方ないと思う。

そりゃあまあ、ずいぶん昔は男色は常識だったそうだけど、あたしにはまだ馴染みがない。

現代も国によっては法的に認知されてたりするし、個人の自由だとは思う。

が、何はともあれ、急に身近な話になるとね！

ちよっと、どうしても心構えとか必要になるじゃない！？

あ、大丈夫、偏見はないから！

慣れてないだけだから！

何だかわくわくしてきたあたしに訝しげな視線を向けたエウが、最もな疑問を口にした。

「びーえるとは何だ？」

やっぱり知らないか。

「ボーイズラブ」

「ボーイズラブ……男と男が、ということだろうか」

「すごい理解力だね」

上手いこと翻訳されている。

それとも、表情筋動かないだけで、そっちの要素アリとか？

ま——っ、エウってば現代っ子！

あたし、その辺興味皆無だけど。

ここでお茶と共に、キンキラ王子が登場——ついでに、容赦なく爆弾を投下した。

「違うよーヨリ。ヨリは剣、僕達は鞘。僕達はね、ヨリとエツチしないと死んじゃうんだ」

「——？」

今度こそ、理解は追いつかなかった。

今、とてつもなく怖い話を耳にしたような気がする。

僕達はね、ヨリとエッチしないと死んじゃうんだ……死んじゃうんだ……じゃうんだ……うんだ……んだんだ…… (エコー)

どこから突っ込めば!!???

いや、待て待て落ち着け。

突っ込むのはあっちであって、あたしは突っ込まれる側であり——いや、そうだけどそうじゃないって言うか何て言うか、そもそもそこで剣と鞘の話なの？

剣と鞘なら剣は凸で鞘は凹だよね。

男女に例えるなら、剣が男で鞘が女では……あれ、でもタトウナ

(女) は剣でアウゼンベルグ (男) は鞘なのか。

……???

何、どういうこと？

極論で、剣は女王様で鞘は下僕とか、SMの話？

ていうか、これ、真面目に考えなきゃいけない話なの？

皆ものっそい真剣な顔してるけど、壮大な下ネタにしか聞こえないのはあたしだけ？

壮大な下ネタにしか聞こえない。

はずなのに、百物語実践中くらいの気持ちです。

何ここ、ファンタジーじゃなくてホラーじゃん！

エブリバディ、ホラー（後書き）

アイアンメイデン

【鉄の処女】

人型をした棘のある開閉扉付きの箱の中に人を入れて串刺しにする有名な拷問器具その1。

【吠える雄牛】

鉄製雄牛型の中に人を入れて蒸し焼きにする拷問器具その2。
中に入る際、口元にはチューブ付きマスクを装着され、叫び声が生
の中からするのでこう呼ばれるらしい。

【審問椅子（祈りの椅子）】

腰掛け、背凭れ、足乗せ、肘掛けなど椅子の全部分に無数の釘を植
えつけてある拷問器具その3。

ゴー、ファイト！

ここで一つ弁解したいことがあるが、あたしは決して尻軽ライトでなければ逆ハーレムにも興味はない。

出会い頭に一発二発……何発かは思い出したくないが、とにかく、犬に噛まれたのだって完璧に不慮の事故だった。

ついでに言うなら若返りという名の身体的退行だって、間違いなく不慮の事故だ。

話が逸れた。

よく勘違った野郎共が「そんなこと言って、体は悦んでるぜでへへ」とかマジでお前は馬鹿野郎かと殴りたくなる台詞を吐いたりしてるが、あれは悦んでるのではなく、女という生き物の防衛本能だ。

まあ、そういった類いの本だのDVDだのってのはほとんどが男性向けのものではあって、客層に合わせた中身になっているのだから仕方ないと言えば仕方ない。

だからこそ、鵜呑みにされると非常に困る。

それは困る——日常生活に支障を来たすし、少なくとも、男女間においては間違いなく多大な問題、しいては障害となると言っても過言じゃなからう。

それは最近、巷で流行っているらしいラノベ然りである。

あたしは銀河系第三惑星地球のアジア圏にある日本という国に生まれ、中流階級のこれまた中の中、所謂本^{いわゆる}当にふつつ——な家庭に生まれ育っているわけで、お国柄、民族柄、人生終始、一夫一妻が当然だと考えているし思っているし覆すつもりは毛頭皆無だ。

長々、ご静聴感謝する。

あ、拍手までもうも。

人生最大のホラーな衝撃発言から素早く態勢を立て直し、それはも

う熱心に弁を奮った。

勢い余って立ち上がった拍子に蹴倒した椅子は、隣のBBがさり気なく直してくれていたので、一応、目配せで礼を述べてある。

追記になるが、あたしは決して、ヒーロー5から死人を出したいとかそういうわけじゃない。

ただ、ただひたすらに――壮大でホラーな下ネタ巻き込まれフラグを回避したいだけである！

あ、フラグも最近覚えました。

本当、上手いこと言うもんだよね。

「でもさヨリ、僕達、せつかく生き残ったのに」

きょんとした顔でデイルが不可解とばかりに首を傾げる。

生き残ったつつうか、イベントは思ったより盛りだくさんだったけど、まだ何も始まってないし成し遂げてもないんだけどね。

ああ、あたしが召喚された時点で、ある意味、ヒーロー4は成し遂げてはいるのか。

なるほどとばかりに四人を見渡し、デイルが持ってきてくれたお茶によろやく口をつける。

……まさかの緑茶とは。

「Oh, Maccya!」

とか言って、タンジーナバロウで流行っているんだろうか。
抹茶じゃないけど。

「そうだ。わたし達はそのためにいる。これが命を賭けて誰かを愛することなのだと思うている」

えらく神妙かつ真剣にエウが言う。

普通に考えれば美形に『命賭けて愛するぜ!』とか言われてるわけで、「……エウ……!」とか言っちゃって薔薇色に頬染める場面なのかもしれないが。

が、ある意味大幅に、どえらい方向で間違っている（しかしある意味合ってもいる）ので、口半開きで

「……あー……ねえ……」

と、何とも微妙な相槌を打つのが精々だった。

「お前、何が気に入らない？」

「お前こそ全く気に入ってねえじゃねえか」と突っ込みたくなる表情でそう続いたトリエーチ。
と、

「美形揃いのハーレムだよ」

にっこり笑うBB。

結局のところ――聞いてなかったと。

あたしの熱弁をお前らガチでマジに聞いてなかったな！！！！！！！
びっくりだよ驚愕だよ脱帽だよショックで脱毛するかもよ！？
ああ、マジ頭抱える！

「オーマイガッ」

「オーマイチャ？」

「Oh, Maccya!」

「Oh, Maccya!」

「エクセレント!」

びつと親指を立てれば、ディルもまた、びつと親指を立ててバチンとウインクをかます。

……違う。

「そんなことやってる場合でなくて」

「マツチャって何だ？」

「ちよっと黙ってトリエーチ」

「は！？おま……っ、……くそっ」

何でそんなシリアスに舌打ちしてんの？

それとも美形が顔を歪ませるだけで、シリアスに見えるの？
とにかく、抹茶だろうが脱毛だろうが、上っ滑りだだ滑りな会話して
る場合じゃないのは確かで。

今度こそ流し流されでわけワカメになる前に、順序立てて話をしなければ！

ほら、何事も落とし込めば、解決策が見つかる可能性もあるわけだしね！

ちょっと落ち着いて話そう——落ち着いて——……

「……ヨリ……」

——甘い響きを伴った声が耳元を掠め、そこに疼くような温度を残す。

残したのはBBの唇に他ならず、いつの間にか彼の手は腰に回され、
もう片方は無理矢理着込まされた細かな刺繍が施されたジャケット
のボタンを外しに掛かっていた。

「つて、ちょ……っ!!??」

——あれっ？

う、動かない!?

違う、何か体が痺れてる!?

と、す、と顎に当てられたのは知らない感触の指先。

ちよっと当てられただけのはずが全く動かすことさえ出来ずに、眼球だけでも何とか！と思えば、すいっとそのまま顔を向けられた――先には、何故かエウのドアップが。いつの間に隣にいたんだ！

「大丈夫だ。せめて、痛くはせずに愛することを誓う」

――何の話だ！！！！！！

どうせ誓うなら止めることを誓ってください！

続行当然みたいな流れはやめろ！

てかお前、痛くするの好きみたいに聞こえるけど！？

この場合、精神的『愛する』じゃなくて肉体的なその話だよね！？

と、全くあたし of 意思は丸無視でしつかりと捕えられた唇は、容赦なくエウの舌によって翻弄される。

ちよ、やめ……って、お前上手いなやばいマジでヤメロ！

酸欠とテクニクで朦朧としている間にBBの指はジャケットのボタンを外し終わったらしく、アンダーの中にするすると怪しい動きで侵入し始めていた。

手馴れた動きでゆっくりと、撫でるようにピンポイントを掠めていくそれに、思わず体が弓なりになるけど、エウがそれを許さずにつちりと頭を両手でロックする。

「……はっ、」

一瞬離された唇は酸素を求めて意味のなさない言葉を吐いた。
と、視界の端を掠めたトリエーチが、眉根を寄せたままに苦い顔を
していて……

「……ちっ、仕方ないな！」

小さく小さく吐き捨てた。
一瞬、助かったと思ったのも束の間。

「——!？」

足元に気配を感じてすぐ、腰のベルトに手が回される。
カチャカチャと鳴る音は、考えたくないけど、間違いなくベルトが
外される音だ。

「私もせめて、気持ちよくしてやろう」

トリエーチ!？

何で急にやる気出したの!？

てか、やる気の出す方向がやっぱり違——うっ！

そうしてどんどんと酸欠になる頭、ぼんやりしていく気持ち、相反

するように熱を帯びていくのは体で——どうして、こんなことに？
どこもかしこも少しずつ力が抜けていく中、耳を掠めたのはデイル
の声だった。

「ね、よく効く痺れ薬でしょ？媚薬も少し混ぜてはあるけど、皆の
テクニクならいらなかったかなあ……あ、僕は足の指を舐めてあ
げるね」

頬にチュ、と軽いリップ音を立てキスをしたデイルは、きっと、そ
れは眩しく笑ったことだろう。

……頭が、ぼんやりする……体が、疼く……ああ、もう、どうでも
いいか……

四人一辺にとか始めてだけど……四人……一辺に……？

ぱちっと、途切れていた神経が繋がったような感覚だった。
一瞬にして正気に戻るって、こういうことなんだろう。

——四人一辺になんか無理だ！！！！！

「……めて……」

流されまくってたあたしが初めて言葉を発したからか、エウが少し
だけ唇を離した。

「何、だあっ!？」

ガツッ!と骨のぶつかるような音がして、

「えっ?——ったあ!!!!!!」

気を取られたBBが痛みに仰け反り、

「何……ぐふっ」

足元のトリエーチも前屈みに倒れ込んで、

「ちょ、ヨリ——ったあああ!」

バチーンッ!と小気味よい音と共に、ディルの悲鳴が響いた。

シ——ン。

そして訪れた静寂の中、あたしは急いでトリエーチから剣を抜き取る。

「い、いい加減にしてよねっ！」

が、それでもちろんどうこうなど出来ないのです、すぐさまそれを投げ捨ててから、ゴッ、ゴッ、ゴッ、ゴッ！と、四人の脳天に拳骨を食らわせ、そして、

——号泣した。

ゴー、ファイト！（後書き）

具体的に四人が何をされたのか。
真実は次回に持ち越し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5475w/>

生贄ヒーロー

2011年12月5日21時54分発行